吉村昭と浦安の「白い道」

横松和平太

昭和2年生まれ

私が好きな作家の一人である吉村昭は、昭和2年5月1日東京は日暮里の生まれである。文字通り昭和に生まれ、多くの名作を残し、平成の世に凛として亡くなっていった人であった。昭和2年生まれの世代は少年時代を戦争の中で過ごし、青年の入口の18歳ぐらいで終戦を迎えている。末期戦中派最末期世代とも呼ばれている。少し上の世代では多くは徴兵で軍隊を経験し、下の世代は学童疎開や勤労動員の経験があるが殆ど軍隊経験がない。ほぼ同世代でも体験が微妙に異なっているのだ。同年生まれの作家が何人かいる。

吉村昭と全く誕生日が同じ北杜夫は、東京の南青山生まれ。旧制松本高校に在学中で、勤労動員先の信濃大町は昭和電工の広場で玉音放送を聞き虚脱した。城山三郎は名古屋市に生まれ、海軍特別幹部練習生に志願し広島県呉市の砲術学校で軍隊生活をしていた。当日は野外演習中で玉音放送を聴いていないが、軍隊の突然の崩壊に精神的な打撃を受けた。山形県鶴岡市郊外黄金村生まれの藤沢周平は、夜間中学に通い黄金村役場で働いていた。役場の控え室で敗戦のラジオ放送を聞き、〝だだっぴろい空虚感に包まれていた〟。

吉村昭の終戦の一日のことを、私が読み知ったのは最近のことだ。岩波書店が彼の死後出版した随筆集『白い道』(2010年)の中に「白い道」という一編を目にしたからだ。

随筆「白い道」

この文の初出は平成6(1994)年の『文藝春秋』8月号とあり、概要は以下のようである。

一 昭和20年3月に、軽度の肺結核の為旧制中学校を欠席がちとなり落第となったが、戦時特例により卒業した。上級学校へは進学できずにいたが、当時長兄が浦安町の江戸川ぞいで造船所を経営しており、そこで少年工たちと木材運びをしたり、手斧で龍骨けずりをしたりして働いた。徴兵検査を8月初旬に日暮里の小学校で受け、第一乙種合格となった。

「八月十五日は曇天であった。正午に玉音放送があったが私は浦安の町の中を歩いていて、廃業したクリーニング屋の前で足をとめ、その家の中からきこえてくる放送をきいた。主婦や子供にまじって初老の漁師もいた。…(中略)…私はクリーニング屋の前をはなれ、造船所に通じる入江ぞいの道を歩いた。路面は白い貝殻屑におおわれていた。

空はにぶく光り、白っぽかった。戦争に負けるということは白いことなのだ、と妙なことを考えながら、私は白い道を歩いて行った。」一

それまであの吉村昭が終戦の日を浦安で迎えていたことを知らなかった。あまり知られてはいないようだが、昭和20年の夏の日々を浦安で過ごしていたのだ。この随筆から吉村昭と浦安の関わりについて俄然興味が湧くことになった。この文章の中から幾つかの点に焦点を当てて見ることにした。長兄が経営していたという造船所というのは？吉村昭はどんな暮らしをしたのか？。浦安のどこで玉音放送を聞いたのか？などを知りたくなった。

浦安造船所

吉村昭は父・隆策、母・きよじの間の9人の子供の8男に生まれている。静岡県出身で製綿業者であった父親は若くして上京し、日暮里で製綿・紡績業を営み安定した生活を続けていた。長兄は16歳の年上で利男といい、家業を父より引継いでいたが、戦時下の統制経済体制により工場閉鎖、紡績機械の供出等により休業状態を余儀なくされた。長兄は軍需産業への転業を試み、全く知識や経験は無かったが、受注が多く見込まれた木造運送船の建造を思い立った。知人・縁者の中に軍の関係者がいて、その方面からの情報ではないかと思われる。各地の木造船工場や船の発注元である海運会社の関係者の意見も聞いたという。造船所の場所選定に当たっては、仙台付近から南の太平洋沿岸をたどり、旧江戸川河口の漁師町浦安に決め、川沿いの土地を購入した。これは何時のことかと言えば、昭和19(1944)年春には造船を始めたというから昭和17・18年頃のことであろう。

地元の資料『浦安のべか船』によれば、「正式名称は有限会社 浦安造船。はじめ匿名組合で、軍部の政策として個人で船作りができなくなったため、浦安の船大工が集まって結成した。足立で紡績会社を営んでいた吉村利男氏を社長に迎えてから有限会社となった。事務所は最初、渡辺造船にあり、堀江4丁目の現在ライオンズマンションがある場所に作業場があった」。地元の元船大工棟梁からの聞き書きには「昭和十七、八年頃でしょうか、船大工の親方連中がウチに毎晩集まって鳩首協議ですよ。材料も資金力もない、大型の船を造る技術もない、難題を抱えてたんですが、消防団長などをして力のあった吉村利男さん(作家吉村昭氏の兄)が、資金を出して、会社を作ったんです」(『浦安・海に抱かれた町』)とあった。浦安の船大工たちはこぞって参加したが、いずれもべか舟が専門だったので、高知県から鰹船の船大工を集めてくるなどした。千葉師範学校の勤労動員学生、徴用逃れの人など200人位が働き、月に二艘の割合で戦時標準型の150トン級木造運搬船を造ったという。

造船所暮らし

地元の少年工達にまじって、吉村昭も4月頃から働き始めたが、経営者の弟で、肺結核の既往症があるからといっても長兄は特別扱いをしなかった。他の少年工と同じように、材木運びや手斧をふるって龍骨削りをさせられたが、「初めの頃、労働は辛かったが、慣れてくるにつれて木造船作りに従事していることが楽しく感じられてきた。」(「炎天」)船の進水式には「町の神社の神主がやってきて祝詞をあげる。」とあるが、近くの清瀧神社のことか。造船所での生活を恵まれたものと感じてもいたようだ。何故なら、東京と川を隔てているだけで、空襲警報もあまり鳴らず、夜も安眠できたからだ。食糧も豊かであった。上流の工場群が爆撃で破壊され汚水が絶えたため川の水が澄み、戦争のせいで漁船の出漁も減り、海にも川にも魚が増えていた。造船所から出る木片や鉋屑が、燃料として魚・貝・海苔などと交換された。農家から芋や大豆が持ち込まれることもあり、空腹を感じずに済んだのだ。

船の材料となる材木の切り出しにも、千葉県の山林に屈強な他の従業員等とともにトラックで出かけた。「最年少の私は、記録掛りであった。かれらは経営者の弟である私が煙たいらしく冷たい視線を向け、私は終始おどおどしていた。」(「私の青春」) 彼らは山芋と鶏卵をつなぎにそばを打ったり、マムシを捕まえてブツ切りにして味噌をつけて焼いたりと、ワイルドな体験も新鮮だったようだ。この時に蓄えた体力が終戦後に経験した過酷な結核治療に耐えるのに役立ったかも知れない。

造船所には、慰問で落語の柳家小さんと俗曲の都家かつ江が来たようだ。蟹や佃煮などを手土産にして舟で帰っていったとある。(「私の青春」)

吉村昭は、棟割長屋のような宿舎に寝泊まりしたと書いているが、おそらくそこは旧江戸川沿いの作業場に隣接してあった社宅のようなものだったのだろう。

当時長兄・利男氏は30代前半という働きざかりであったが、評伝「吉村昭」には利男氏をめぐって興味深い逸話が紹介されている。

昭和19年9月というから、造船所を立上げて間もない頃に陸軍に招集され満州に出征したとある。それを父・隆策が軍関係者に働きかけて、召集解除に成功し帰国させた。詳細は省くが、使ったコネには沖縄戦の軍司令官牛島満中将とか、参謀本部暗号班の藤原邦樹大尉が登場する。牛島中将は、隆策の義兄が家族ぐるみの付き合いがあったというが、昭和19年8月上旬には沖縄の軍司令官になっており、相談できたのかどうか真偽の程は定かではない。藤原大尉という人は三兄・英雄の妻の兄にあたり、終戦の数日前に暇乞いのようなことを告げに三兄を訪れ敗戦の日が近いことを知らせたという。後に吉村昭が『大本営が震えた日』を書くに当たって取材協力した人でもある。

何時帰国出来たのか不明であるが、翌昭和20年の早い時期か？。4月には弟・昭を受け入れているのだから。長兄が戻って来るまでは、父が息子に代わって会社の面倒を見たのであろう。終戦を挟んで、造船の仕事は続けられたが、軍関係の仕事がなくなり、わずか五、六ぱいの船を造ったり、修理の依頼があるだけの状態となったらしい。

9月には、吉村昭は長兄の元から父と弟もいた次兄武夫の足立区の家に戻った。
父は、この年の暮れに癌のため亡くなったが、柩の部材を浦安の造船所から長兄が調達した。船とリヤカーで家の近くに運び近所の老家具職人に作ってもらったという。

撃墜されたB29

昭和17(1942)年4月18日に、当時15歳の中学生であった吉村昭は、東京初空襲の米軍機B25一機を目撃している。物干し台で凧をあげている時、「風防に見えた二人の飛行士の首に巻いたオレンジ色のマフラーが印象的であった。」と、「私の［戦争］年譜」に書いている。まだ戦争初期で日本軍が攻勢の時だったから意表を突かれたものであり、米軍機とは最初気付かなかったという。

次に彼が米軍機の機影を目にしたのは、敗色が濃くなった昭和20年になってからだ。B29の大編隊が東京を空襲した3月10日の大空襲に遭遇し、4月13日の空襲で日暮里の家を焼かれている。その後、浦安町に移住し長兄が経営していた造船所で働いたのは先述の通

りである。東京とは違って浦安は空襲におびえることはなかったが、被害は皆無ではなかった。そんな浦安生活の中でのB29との遭遇を書きとめている。

「勤めはじめて1か月ほどたったころ、造船所に近い干潟にB29が撃墜された。私は建造途中の船の上から干潟に散乱したジュラルミンの機体と周囲にむらがる人たちをみつめていた、やがてもどってきた人たちの顔には、興奮の色があった。かれらの中には、アメリカ飛行士の遺体を蹴ったと上気した顔で言う者もいた。」(「私の青春」)

この出来事を浦安町誌で確かめてみた。防空の記録が残っているが、該当する事項は次の通りであった。

5月24日 …本町南部の海岸近くの海中に、B29一機が墜落した。

5月25日 …本町東方海上から侵入してきたB29四機のうち、一機は煙を吐きながら超低空で…中略…本町上空を僅かにかすめ、東方海上1キロの遠浅海面に激突し、大音響とともに炎上した。海面であったので被害はなかったが、恐怖の数秒であった。

吉村昭が目撃したのは、5月25日のことだと思われる。町誌には記録されていない墜落後の住民の興奮の様子が、描かれていて興味深い。

B29の墜落した遠浅の海岸では、当時は海苔や蛤などの養殖が行われていた。後年この地は、漁民たちが漁業権を放棄し、埋め立て事業が行われ広大な住宅地となり、ディズニーランドに変貌を遂げた場所である。30数年後にはミッキーマウスが降り立ったとは！

玉音放送を聞いた場所

吉村昭は、終戦いや敗戦を告げる天皇の放送を8月15日浦安で聞いたと、先述のように「白い道」で書いている。廃業したクリーニング屋の前で聞いたとあるが、浦安のどこにその店はあったのか？、が気になり確かめたくなった。

玉音放送を聞いた場所について、他に書いていないかどうかをまず調べてみた。すると「白い道」を文藝春秋8月号に書いた1994年より15年前の1979年に読売新聞の夕刊に連載された「私の青春」という随筆の中に既に書いているのことがわかった。

「…天皇の放送は、浦安町の路上で聞いた。元クリーニング店からラジオ放送が流れ出ていたのである。私は貝殻屑におおわれた入り江ぞいの道を造船所に向かって歩いた。空も川も家々も、すべて白っぽく感じられた。思考力は失われていた。…」ほとんど同じ表現であり、手掛りは増えなかった。そこでこれらの文章から、玉音放送を聞いたと思われる場所を特定してみたい。キーワードは〝クリーニング店、入り江沿いの道〟であろう。まず、クリーニング店である。廃業したとか元とか書いてあるが、浦安の町中に昭和20年の8月当時クリーニング店(当時の言葉で言えば洗濯屋)があったのか？クリーニング業界の歴史を調べて見たがよく分からなかった。全国クリーニング会館の史料展示室には昭和9年度の全国洗染クリーニング業者名簿がガラスケースの中に展示されていたが、残念ながら何故か閲覧が許されなかった。戦時下にあっては統制経済の対象となっており自由に営業なぞ出来た時代ではないのが実情のようだ。だから、〝廃業した〟とか〝元〟と書かれていたのだろうとうなづけたのだが。

昭和6年の浦安鳥瞰図には町の中心部の様子が克明に描かれており商店などの名前を識別できるが、ここにも洗濯屋はない。昭和11年浦安生まれの方が自らの子供の頃の、浦安の繁華街〝フラワー通り〟を描いた地図があった。筆者の生年からみて昭和20年(1945)前後の様子だと思われるが、ここにも洗濯屋はない。フラワー通りに無かったとするならば、どこにあったのか？

もう一つのキーワード〝入り江沿いの道〟を考えてみた。入り江と書いてあるのは、境川のことであろう。境川というのはかつての浦安の生活の中心であり、べか船で賑わったところである。フラワー通りもこの川にほぼ並行した道であるが、この川の両側は川に面して家が立ち並んでいて道はない。但し、旧江戸川にある西水門から新橋の間には短かいが川沿いに道がある。ここにあったのかも知れないと思い昔を知る人に訊ねてみたがやはり憶えがないとのことであった。図書館で昔の住宅地図を確かめてみることにした。

最も古くて昭和44(1969)年のものしか無かったが、西水門から新橋の間の川沿いの道で旧浦安町舎の並びに、ポニー化学ドライクリーニング店があった。この店のことかもしれないと思い、再び昔のことを知る人に訊ねてみた。すると、戦後になってからクリーニング店をはじめた若い人がいたことを思い出して下さった。昭和50(1975)年の住宅地図では、クリーニング店は既に空家になっている。昭和40年代の後半のどこかで廃業し、看板だけが残っていたのではなかろうか。何時からこの店はあったのだろうか？ それにしても、戦前からあったのであろうか？そうとも思えないが。どう考えたらよいのか？

吉村昭はひょつとしたら、かつて玉音放送を聞いた場所に後年になっておもむき、廃業した元クリーニング店の看板を見かけたのではなかろうか？そして、その時記憶の混同が起き、終戦時から店はあったと思い込んだ？のでは、と推察してみた。彼は、文芸誌に1978年から1980年にかけて終戦前後の日々を題材に幾つかの短編小説を発表している。自らの戦時下の体験を語り出したのはこの頃からだ。作品からみると、この頃ハゼ釣り等で浦安に度々出かける機会があったのだ。

浦安消防団長

長兄は〝消防団長などをして力のあった〟と先の聞き書きにはあったが、ちょっと気になったので調べてみることにした。消防団長という仕事は半ばボランティアのように自らの仕事を犠牲にせねばならない。尚且つ財力や人望がないと成れない、地元ではとても尊敬された役職だったという。浦安とはそれまで縁の無かった30代半ばの男がいきなり幹部に成れたのだろうか？浦安町誌の消防の項目を開いてみた。それによると戦前は警防団という組織だった。幹部の名簿があったが吉村年男の名前が無い。しかし、戦後の項目を見てみたら昭和22年にその名が出ていた。この年、警防団は消防団に改組され、初代の団長に全消防団員の選挙によって選出されたとあった。戦前からの造船所の設立等を通じて人格・見識・財力が評価されたのであろう。実績があったから戦後に団長に選ばれたのだ。

だが、造船関係の仕事がめっきり減り苦境に陥入り資産もすり減らしたという。事務員の中には建築設計技師がいて、仮設住宅のパネル作りを手掛けたりもした。そして、紡績

機械を構内に設置して紡毛糸の製造をはじめたが、塩害で針布が錆びることが分かり、機械を取外して町から引き揚げ、足立区に戻り事業を再開することとなる。昭和24〜25年頃、作業場は火災にあったため解散したとも。それはいつのことなのか？消防団の歴史を調べてみた。その頃の出動記録によれば、24年9月1日前夜に来襲したキティ台風時にあって地区不明だが全焼。25年12月5日には堀江で3棟全焼1棟半焼、102人出動とある。恐らくこれが造船所の火事ではなかろうか？因みに吉村年男氏は、先の資料によれば、消防団長を昭和25年3月31日に退任している。火災は彼が去った後のことだろう。

吉村昭は、元々純文学を志した人であったが、ブレイクしたのは戦史に題材をとった『戦艦武蔵』(1966年)からであろう。その後もしばらくは戦史記録の分野で傑作小説を書き残した。現場の証言、史料を周到に取材した上での、史実を尊重した緻密な文章が私は好きである。『ふぉん・しいほるとの娘』(1978年)あたりからは、戦後から30年以上経ち戦史の証言者が減少し始めたこともあってか、だんだんと歴史小説が多くなっていった。

文芸誌に発表した戦時下の体験を題材にした数編の短編小説は、短編小説集『炎の中の休暇』に収録されている。その中には、ハッキリとは浦安とは書かれていないが、それらしき箇所が幾つか散見される、見てみよう。

火の見櫓のある漁村

吉村昭の父・隆策は、妻きよじを昭和19年の夏に亡くし、終戦の年の暮れ享年54歳という若さで没した。だが妻の生前から元待合の女将を愛人にしていた。その女と、女の娘とその子供が、江戸川河口方面の漁村に疎開しており、父も空襲のあとそこに避難したこともあるように書かれている。その疎開先の父と女を訪ねて行く場面の描写から、そこは浦安のことだと私は思い込んでしまった。「黄水仙」(1978年)には、〝道は貝殻屑が敷かれていて白く、進むに連れて魚介類の匂いが濃くなった〟〝短い石橋〟といった表現があり、浦安だと決めつけていた。文中に出てくる〝小さな火の見櫓〟〝消防器具が入っているらしいトタン張りの小舎〟はどこかを、古い住宅地図や写真、消防団の資料を手掛りに探した。しかし、特定できなかった。短編「炎天」(1979年)を読み返してみて己の間違いに気付かされた。

〝女は、私がもどる江戸川河口の町に隣接した川沿いの漁村に…〟という箇所をウッカリ見逃していたのだ。河口の町が浦安であり、隣接した漁村というのは市川市の行徳に違いない。早合点とはこのことである。特定できる筈がなかったのだ。

父の臨終の際、最期を看取ったのは吉村昭とこの愛人の二人であった。

稲荷神社

戦後しばらくたってから、吉村昭はしばしば浦安を訪れている。「鯊(はぜ)釣り」(1980年)という短編小説に次のように描かれている。

「その町は、終戦時をはさんで七ヶ月間住みついていた地で、その後も舟遊びに何度か訪れている。」船宿から投網舟を仕立て遊んだのである。しばらく足が遠のいたが、地下鉄

の路線が、この漁師町にまで達してそれまで不便だったのが都心まで二十分足らずになった。それから数年後のある日、鯊釣りのためにこの町のマンションに住む友人から誘われてやってきたという設定である。地下鉄東西線が浦安に開通したのは昭和44(1969)年4月のことである。従って、時制は昭和40年代後半、1970年代前半ということになる。
彼が暮らした頃からの町の変貌ぶりに驚かされている。事実その頃町並みは土地改良事業により道路や建物等が変わり始めていた。

変貌した町を歩きながら、昔造船所で働いていた同僚の男のことを思い浮かべ訪れてみたくなる。そして、男の家に訪れるのだが、意外なドラマがその男には起こっていた。というような話である。私が興味を惹かれたのは、そのドラマもさることながら、彼の住む家をどこにあったと、作者は設定したのか？ということだった。小説の中で、こう書いていた。「町に小さな祠をもつ稲荷神社があって、その右手に狭い露地があり、道を入ってT字路を左に曲がると…その家はあるはずだった」。浦安で稲荷神社といえば当代島の稲荷神社を思い浮かべた。あるいは久助稲荷か。しかし、読み進めて行くうちにどーも違うように思えてきた。「コンクリート造りの短い橋」を渡り、道を進むと「三叉路」があり、路の角に「小さな鳥居と数本の朱色の幟が立ち、その奥に祠があった。」「角を左に曲がると、小さな牛乳販売店があり、それに並んで…の家が見えた。」

昭和44年版の住宅地図等を頼りに、場所を特定できないかと考えた。全体の描写からみて、当代島ではないと思えた。キーワードとなるような場所を、地図を片手に町を実際に歩いてもみた。全てにぴったりくるようなところがなかった。あの頃から更に町は変わり続けている。浦安には昔から屋敷稲荷と呼ばれた小祠が沢山あったが、失われたものも多いという。猫実の庚申様辺りをイメージして描いたのかも知れない。それに、もとよりこれは小説である。事実とフィクションがないまぜになっていて不思議ではない。吉村昭の脳内空間にあった、昔歩いた浦安の町並みだと思いたい。

小説「白い道」

吉村昭の虚実を絡ませた巧みな小説に翻弄された私は、今一度彼の作品群の中に浦安が登場したものがないかどうか確かめてみたいと思った。『人物書誌体系』のシリーズの中に「吉村昭」があったので紐解いてみた。彼の全作品のデータベースが収録されており、年次毎の作品録もあった。「白い道」という作品の項目をみて、意外な事実に驚かされた。このタイトルには、実は随筆の他に同名の小説があることが分かった。随筆が『文藝春秋』に掲載された年から27年前の昭和42(1967)年、雑誌『季刊藝術』10月号掲載とあった。『星への旅』(新潮文庫)に収録、とあったので早速図書館で借り出し読んでみた。

幾つかのモヤモヤが氷解するとともに、新たな発見があった。その小説では、浦安町という地名がハッキリと書いてあり、その他の地名もフィクションではないと知れた。浦安造船所で働いた日々のこと、B29が浦安の干潟に墜落したこと、父とその愛人のこと、二人が空襲を逃れて市川の家に居たこと、等が書いてあった。火の見櫓のある漁村とは行徳であり、そこへ一度は捨て、逃げた女房・子供を探しにやってきた男のことが書いてあった。「黄水仙」や「炎天」の火の見櫓が出てくる話のオリジナルなカタチがあった。

吉村昭が浦安での自らの戦時下での体験を書いたのは、昭和53(1978)年頃からだと考えていたが、そうではなかった。その10年以上前に、原点ともなる小説をそれもほぼ事実に則して書いていたのだ。『戦艦武蔵』『零式戦闘機』を書いていた時代であった。文庫本の解説によれば、「生死の危機、人間の行為の荒唐無稽さや、徒労感などの根にあるものを空襲体験を通じて描いている」とある。

私が感じたのは、浦安とか行徳といった辺りの戦前の様子も良く描かれていることだ。「東京とは川一つへだてただけの地域だが、江戸川河口附近の人々の気質は、漁師町のそれだった。町には魚介類の匂いがしみつき、人々の気性は荒々しかった。」

行徳の町はずれでの、男との会話の描写には、こういう文章があった。

「白っぽく乾いた道がつづいている。路上には貝殻屑が敷きつめられているらしく、土の中に細かい貝殻の破片が散っている。…敷きつめられた道が一直線に伸びた」

随筆「白い道」では、玉音放送を聞いた川沿いの道が白い道であったが、原点となった小説では、行徳から浦安へと続く道が「白い道」だったのである。

浦安を舞台にした小説は、山本周五郎の『青べか物語』が有名である。しかし、吉村昭は『白い道』を書いた。今のようなモダン浦安になる前、古き漁師町の面影の残る町の姿が伝わってくる。機会があれば読んでみていただきたい。

蛤や浅蜊などの養殖が盛んだった浦安では、貝殻屑がいっぱい出た。貝殻屑は漆喰(しっくい)などの原料生産の為、貝灰工場で焼かれたりしていたが、主要道路以外では貝殻屑が道に捨てられ、舗装代りにまかれていたという。歩けばギシギシという音がし、泥棒よけになったとも聞く。漁師町特有の魚臭い匂いが、町や白い道に立ち込めていたのであろう。

この浦安独特の風景も今ではもう見られない。有形文化財の旧大塚家住宅や境川沿いの屋並みの間の路地に、かつての痕跡が僅かに残るのみである。　　…故 吉村昭の命日に (了)

参考資料

『白い道』(吉村昭/2010年刊)、『東京の戦争』(吉村昭/2001年刊) 註:「私の［戦争］年譜」を収録
『履歴書代わりに』(吉村昭/2011年刊) 註:「私の青春」(1979年)を収録
『炎の中の休暇』(吉村昭/1981年刊) :註(以下の作品を収録)
「虹」(『群像』1978年9月号)「炎天」(『文學界』1978年10月号)「白い米」(『文學界』1979年1月号)
「鯊釣り」(『文學界』1980年3月号)「黄水仙」(『海』1980年11月号)
『星への旅』(1974年):註「白い道」(吉村昭/『季刊芸術』1967年10月号)を収録
『吉村昭』(川西政明/2008年刊)、　『人物書誌体系41-吉村昭』(木村暢男 編/2010年刊)
『AKIRA YOSIMURA ふるさとを描いた作家』(荒川区教育委員会/2012年刊)
「私の中の日本人ー吉村隆策ー」(『波』(1975年8月号)
『浦安町誌(上・下)』(1969年刊)
『浦安のべか舟』浦安市べか舟調査報告書(浦安市教育委員会/1993年刊)

『浦安・海に抱かれた町』(1995年刊)
『浦安の民俗』(浦安市教育委員会/1996年刊)
「クリーニング史料展示室資料」(全国クリーニング会館)
写真集『花と心と人生と』(内田実弥/1996年刊)
『浦安町住宅地図』(ゼンリン/昭和44年度版、航空住宅地図帳/昭和50年度版)

他WEB資料多数